



官能人肉食小説

「蟻地獄」

大黒達也

## 『蟻地獄』

作者 大黒達也

### 【あらすじ】

巨額の現金と、極上の美女を強奪する凶悪な銀行強盗団のメンバーであった女戦士のアリサは、警察からの追及を逃れ、人質とともに北海道の山中に潜伏する。バイセクシャルであるアリサは、若くて美しい女達を人質として樹海の奥深くにある別荘を不法占拠し、人質達をありとあらゆる方法で凌辱し、最後には食材として調理して食らう。

一方、アリサを追って警視庁の工藤真弓が新人婦警の桜井由香とともにアリサ追跡の旅に出る。

『ブラック・ムーン』の番外編

【登場人物】

アリサ

謎の銀行強盗団の女戦士、残虐な性格と美貌の持ち主

工藤 真弓（クドウ マユミ）

警視庁公安部外事一課警視。警視庁一の美しい容貌肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる

凄腕の持ち主

桜井 由香（ゴトウ ヒトミ）

警視庁公安部公安課警部補。スタイルが良く顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人。コンピュ

ータを使った情報収集能力に長けている。

白石 美由紀 (シライシ ミユキ)

警視庁航空隊所属役職は警部、ヘリの操縦にか  
けては警視庁内で並ぶものがない。

その他アリサの性交奴隷となる女達

アリサによって拉致され、激しい凌辱の後に、  
食肉として調理され食り食われる若くて美しい

女達。

【目次】

- 第一章 プロローグ
- 第二章 追跡者
- 第三章 人食いの館
- 第四章 地獄のハーレム
- 第五章 人肉の宴
- 第六章 追跡
- 第七章 エピローグ

## 『本編』

### 第一章 プロローグ

深い森に刻まれた林道は、終わりが無いかのよう  
に何処までも続いていた。

既に何時間も歩き続けていた。アリサは先を行  
く三人の女達を眺めていた。

皆、アリサの獲物だった。三人とも後ろ手を

縛られ腰紐を打たれていた。アリサが腰紐の先端  
を握っていた。三人とも美しい容姿を持っていた。

ジーンズを履いた足が長くきれいに伸びており腰  
の位置が驚くほど高い。

警察と自衛隊によるアジト襲撃から半日が経過

していた。

アジトを逃れる際に、警視庁公安部の美由紀と他に二人の人質を攫ってきたのは正解だった。美由紀以外の二人の若い女達は、林道を散策していた旅行者であった。

アリサの所持品は、ハンティングナイフに自動小銃と拳銃一丁それに、リュックに納められた捕虜を拘束する際に使用する特殊ベルトのみであった。この特殊ベルトは、ベルト部分と爆薬部でできており、捕虜の首に装着するものであった。捕虜が抵抗を示したり、逃亡した場合に遠隔で爆発させることができる究極の拘束装置であった。

調整と装着に多少手間がかかるので、落ち着いた

ら使用しようと考えていた。

食料は気にすることは無かった。前に行く女達の尻を見ながら、誰から先に食らってやろうかと考えていた。腹の中では、美由紀を最初に食らうことになるだろうと思った。

美由紀は公安部の刑事だ。アリサにとっては宿敵であり、最も危険な存在だった。食らう前には、十分鬨るつもりだ。人質は食料として連れてきた。周囲は山菜の宝庫であったが、アリサには山菜やキノコ等の知識は皆無だった。

アリサと拉致された女達は、それから二時間ほども周囲を深い原生林に囲まれた林道を歩いてい



た。その間、一度も走行する車両には出会わなかった。

林道はいっしか、幅五メートル深さ三十センチほどで水底には清流のみに見られるバイガモが繁殖する川沿いの道となっていた。大きなカーブを曲がったところで前方にランドクルーザが停まっていた。車内を覗いてみたが蛻の空であった。

キーも見当たらなかった。

アリサは三人の女達を近くにあった鬼グルミの大木の根元に縛り付けた。

「大人しくしていないと、撃ち殺すからね」

アリサは自動小銃の安全装置を外し、女達を脅してから、清流沿いの林道を、足音を忍ばせるよ

うに歩いた。

少し進むと若い女の笑い声が聞こえてきた。茂みの中から声のする方を確認した。二人の若い男女が膝まで清流に浸かり、ルアーフィッシングに興じていた。二十代前半に見える女は鼻筋が通り、美しい大きな瞳を持っていた。身長も百七十センチ近くはあった。足が長く腰の位置が驚くほどに高かった。アリスの瞳が輝き出した。大好物の部類であった。

男の方は身長百八十センチ以上あり、筋肉質で引き締まった体躯をしていた。二人は肩を寄せ合うようにして、水面を漂う釣り糸を目で追っていた。

「釣れるかい？」

アリサは自動小銃を肩に載せ、二人の背後から声をかけた。ふたりは驚いたように振り返った。

ふたりの視線はアリサが持つ自動小銃に釘付けとなった。

「これかい？こいつは玩具じゃないよ」

アリサは銃口を二人の方に向けた。

「何をするんだ！」

男が女を背後に庇うようにして、アリサを睨みつけた。

「マツチヨなお兄さん。彼女の前でカッコつけるんじゃないよ。こいつは本物だって言っているだろ」

軽快な連射音が鳴り響き、二人の周りにニメー  
トルくらいの高さがある水柱を上げた。

「曜子。逃げろ！」

男は絶叫しながら、アリスに向かって両手を大  
きく広げて襲いかかった。再び銃声が鳴り響き、  
男の膝から血煙が上がった。男は前のめりに倒れ  
伏した。曜子と呼ばれた女は、逃げようとせず、  
腰を抜かしたようで、水底に尻を付けて震えるば  
かりであった。

アリスは、ゆっくりとした動作で清流に踏み込  
み、川面で起き上がろうとしている男の顔を蹴り  
上げた。見事にヒットし、男は低い呻き声を上げ  
て意識を失った。男の襟首を片手で持ち上げ、軽々

とした感じで岸辺に運んだ。白樺の幹に男をもたれさせた。男のジャケットを探り、車のキーを奪った。今度は清流で泣き喚いている女に向かった。「あんた。凄い美人だね。名前は曜子っていうんだらう？」

アリサは淫らな笑みを浮かべながら、泣き喚く曜子を上から見下ろした。

曜子はただ泣くばかりで、アリサを決して見ようとはしなかった。アリサは舌を鳴らして曜子の腕を掴み立ち上がらせた。意識を失った男がいる場所に連れて行き、おもむろに曜子のジャケットを両手で引き裂いた。曜子は驚きの表情を浮かべ、嫌々をした。アリサは鼻歌を歌いながらブラジャ

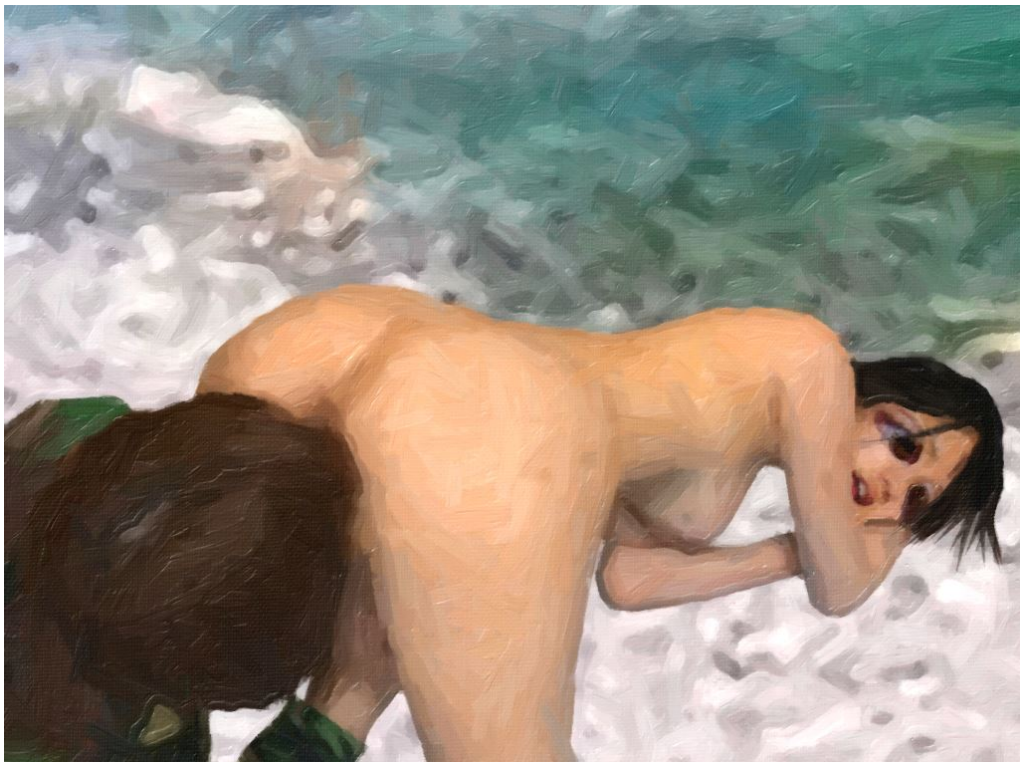
ーを片手で筆り取った。美しくたわわに実った乳房が零れ落ちた。

「なんて綺麗なオツパイなんだ！」

アリサは曜子の乳房を口に含み激しい勢いで吸った。曜子の泣き声がさらに高くなった。アリサはもどかしげな手付きで曜子の胴長とジーンズを脱がせ、パンティを筆り取った。洋ナシのように丸みを帯び、シミひとつない美尻が露となった。地面に四つん這いの姿勢を取らせ、背後から尻の割れ目を覗き込んだ。

アリサの冷たい舌が曜子のアヌスや膣周辺を舐

「ケツもきれいなピンク色しているよ」



め上げた。曜子にはこれまで同性愛の経験は無く、屈辱で心が張り裂けそうになっていた。狂人のような女が現れるまで恋人の圭吾と楽しいひと時を過ごしていたのだ。銃で撃たれた圭吾のことが心配であった。

「圭吾、助けて……」

曜子は蚊の鳴くような声で、白樺の根元で意識を失っている男の名を呼んだ。

「こいつ、圭吾っていうんだ。なかなか男前だね。

チ\*ポもでかいんだろう？」

アリサが盛り上がった白い尻の割れ目から顔を上げ、猥らな笑みを浮かべた。

「お願いです。助けて下さい。圭吾を病院に連れ



て行って下さい」

曜子はアリサに、臆やアヌスを指先で弄られながら、必死の思いで懇願した。

「そんなに恋人のことが心配なのかい？自分のことも心配した方がいいんじゃない。お前はもうアタイの家畜なんだよ。この柔らかくて美味しそうな肉をどう料理してやろうかね」

アリサは、再び尻の割れ目に顔を押し付けて、アヌスや膣を舐め始めた。暫くそれを続けた。女の身体を知り抜いたアリサの凄まじいまでの舌技に、曜子は快感を覚え始めていた。アリサの舌が動くたびに曜子の白い肉体がビクンと跳ねた。乳首を指先で刺激されながら、尻の割れ目を激しい

勢いで舐られ、屈辱や恐怖も薄れかけていた。男には絶対に真似ができない性技と言えた。

アリサがアヌスを舐めながら、膣に指先を入れてきた。膣壁を擦られる感触に眩暈を感じた。曜子は泣いていた。それは悔し涙では無かった。あまりに巧みな愛撫のため、曜子はアリサに征服されかけていた。曜子はアリサの顔に美尻を擦りつけながら、アクメに達した。

今度、アリサは曜子をマングリ返しにして、膣を激しい勢いで舐め始めた。

「曜子……」

圭吾が意識を戻した。大量の出血のために意識が朦朧としていた。

「気がついたかい？」

アリサが、曜子の股間から愛液に塗れた顔を上げた。全裸の曜子は何度も逝かされたようで、茫然とした表情で雲ひとつない青空を見ていた。

「お願いだ。曜子だけは助けてくれ」

「まったく、お前達の熱々モードにはついていけないよ」

アリサは立ち上がり、腰のベルトからシグザウエルP二二六を引き抜いた。圭吾の前に立って、両腕を撃ち抜いた。圭吾は重たい呻き声を上げた。両腕を撃ち抜かれた激痛で、顔面には滝のように冷汗が滴り落ちていた。

アリサは圭吾の胴長とジーンズを脱がせ、パン

ツを尻から引き抜いた。萎びた男根を摘み上げ、口に含んだ。圭吾の顔を見上げながら、口腔性交を始めた。

激痛に全身を震わせていた圭吾の男根が、勃起し始めた。すぐに黒々とした男根が天を突いた。

アリサはジーンズとパンティを脱いで、その上に跨った。圭吾の顔を舐めまわしながら、激しい勢いで腰を動かした。圭吾は数分と持たなかった。

アリサの膣内にすべてを放出した。

アリサは圭吾から離れ、囃子を立ち上がらせ、

圭吾の前に連れて行った。

「冥途の土産に、匂いを嗅がせてやるよ」

アリサは囃子を背後から両足を開かせた状態で

抱え上げ、圭吾の顔に股間を押し付け鼻と口を塞いだ。渾身の力を込めて曜子の股間を圭吾の顔に押し付けた。

「止めて。お願い……」

曜子が美しい顔を歪め泣き叫んだ。呼吸困難のために圭吾の全身が震え始めた。

「どうだい？恋人のマ\*コの匂いは？」

アリスが曜子を地面に横たえ、片足に固定していたハンティングナイフを引き抜き、圭吾の髪を掴み、首筋に押し当てた。

「早く殺せ」

「殺される奴は無様に命乞いをするものさ」

「そんなことをしても、お前は殺すだろう」

圭吾は、どこまでも好き通った瞳で曜子の顔を見詰めた。曜子は地面に腹這いとなり、見詰め返した。アリサが残忍な笑みを浮かべ、ナイフを持つ手に力を込めた。

「嫌！」

次の瞬間、曜子の絶叫が樹海に響き渡った。

アリサが失神した全裸の曜子を肩に担ぎ、ランドクルーザが止めてあった場所に戻った。

「その女性をどうしたの？」

鬼クルミの根元に縛り付けられた美由紀が、アリサを睨みつけた。

「こいつかい？どうだい。最高の雌豚だろう。今

晩のオカズにしようと思っつね」

「殺したの？」

「ちゃんと生きているよ。今、殺しちゃったら、  
生きが下がるだろう。肉は新鮮なのが一番なんだ  
よ」

アリサは曜子の尻に頬ずりをしてから、上を向  
いて勝ち誇ったように大きな笑い声を上げた。

それから一時間ほど、アリサが運転するランド  
クルーザは林道を走り続けた。いつしか林道は白  
樺林の間を走っていた。少し進むと、白樺林が途  
絶え、百メートルほどの距離に建坪百坪ほどもあ  
る洋風造りの民家が見えた。人の気配は感じられ

なかった。こんな場所に立っている白亜の豪邸など金持ちの別荘ぐらいしか、思いつかなかった。無人ならば格好の隠れ家になる。アリサはひとり笑みを浮かべた。ランドクルーザーを民家の駐車場に滑り込ませた。

周囲を白樺林に囲まれた家の周りには、テニスコートや水が抜かれた屋外プールがあった。

「済みません。何方かいらっしゃいませんか？」

アリサが玄関前で、ブザーを押しながらドアを叩いた。いくら呼んでも返事は無かった。手馴れた手つきで鍵を挟じ開け、女達と内部に侵入した。

普通の家なら居間ほどの広さがある吹き抜けの玄関ホールには、大窓から陽光が差し込んでいた。



床は総大理石張りで、いかにも金持ちの別荘と言った感じだった。

玄関ホールと続きになっている広さ六十畳ほどの居間には、白いシートがかけられたソファセットや大型液晶テレビが置かれていた。

アリサは玄関脇の納戸で見つけたロープで、曜子以外の女達を居間の柱に縛り付け、屋敷内の探索に出かけた。曜子はランドクルーザの荷台で意識を失ったまま倒れていた。後ろ手を紐で拘束してあるので逃げ出す心配は無かった。

まず、居間の隣にある広さ四十畳ほどのダイニングルームに入った。

中央にはイタリア製の高級ダイニングテーブル

が置かれていた。座り心地のよい椅子が十席並べられていた。

隣接する二十畳ぐらいの厨房には、広大な調理台が中央に鎮座していた。それはマグロを解体することが可能なほど、大きかった。アリサは大理石で造られた調理台の上を手でなぞりながら、猥らな笑みを浮かべていた。これだけの大きさがあれば女達の肉体を楽々と捌くことができた。深鍋や大型のフライパンも好都合であった。調理台の下は棚になっており、開き戸を開けると、刺身包丁や肉切り包丁が納められていた。アリサは刺身包丁を目の前にかざした。研ぎ澄まされた鋭い切っ先を見て思わず、身震いした。女達の尻や太

腿に突き刺す感触が思い起こされた。命乞いをして泣き喚く美由紀をこの包丁で捌く光景が脳裏を過った。

食器棚には外国製の高級食器が整然と納められていた。アメリカ製の大型冷蔵庫は電源が入ったままで数十本の缶ビールが冷やされ、冷蔵庫には牛肉や生ハムや魚介類を冷凍したものなどが詰まっていた。アリスは、それらには、あまり興味を持たなかった。肉類は女達の肉体から得ようと思っていた。長年、人肉を食べ続けたアリスは一種の依存症になっていたのだ。食品棚には米や小麦粉が納められていた。冷凍庫や食品棚の食料は家畜である女達に与えようと思った。

厨房の隣は大型冷凍室になっていた。ドアを開けると冷気が噴き出してきた。中には何も保存されていなかったが、捌いた後の女達を保存するには好都合だった。首や手足を切断し、天井から吊るしておけばよかった。

アリサは空っぽの冷凍室内を見詰めながら、猥らな笑みを浮かべていた。

バスルームは一階の裏庭に面していた。浴室は広さ三〇畳ほどもあり、浴槽は大人五人がゆったりと入れるほどの広さがあった。

ここは女達を前処理する場所としては最適だった。捌く前に腸内洗浄をする必要があるからだ。

これだけの広さがあれば、十分であった。極上の女達を四つん這いにして並べ、アヌスに温水を注入していく。考えただけで身震いした。

一階には他に見るべきものは無かった。アリサは一旦居間に戻り、女達の様子を確認してから、玄関ホールに行き、地下室へ続く階段を降りた。

地下には、四部屋あり、一室はワインの貯蔵庫となっていた。高級ワインが千本以上も納められていた。これでアルコールの心配をすることは無かった。

二番目の部屋は地下に設けられたラウンジで、カウンターが設けられ、その奥の壁には棚が作ら

れ、高級ブランデーやウイスキーが並べられていた。何もかにも隠れ家としてはお誂えの場所であった。

三番目の部屋にも鍵が掛けられていた。それも数秒で外してしまった。

部屋に入り、照明のスイッチを入れた。アリスは思わず、笑みを浮かべていた。そこは、拷問道具が並ぶ、地下のS Mルームであった。持ち主の趣向が理解できた。壁一面には、様々なタイプの鞭や拘束具や極太の張形が並べられていた。

中央には産婦人科で使う分娩台も置かれていた。小型冷蔵庫の中には、浣腸液が詰まった小瓶がい

くつも納められていた。これで女達を存分に責め抜くことができるだろう。アリサは思わずジーンズの隙間から股間に手を入れ、クリトリスを触っていた。

最後の部屋には、ドアに鍵がかけられていた。

アリサは小道具を使い手馴れた手付きで、鍵を解除した。中は十畳ほどの広さがあった。壁の一面はすべてが棚となっており、段ボール箱が整然と納められていた。箱の中身はアルバムといった他愛の無いものであった。ページを捲ると、二〇歳くらいの女が写っていた。その美貌にアリサは暫しの間、魅入っていた。写真には撮影年月日が

印刷されており、去年の夏に撮影されたものだった。

この家の住人であれば、いつか戻ってくる可能性があった。アリサは女を是が非でも自分のものにしたくなった。

他の箱も同様の中身であり、貴重品の類は無かった。アリサは不審な顔で、室内を見回した。

足もとに視線を向けた。部屋に不似合いの高級絨毯が敷かれていた。アリサは屈みこんで、絨毯を捲り上げた。思ったとおり、絨毯の下には、戸板が設けられていた。取ってを引くと簡単に開いた。中を覗き込むと、同じくらいの広さがある部屋になっっていた。梯子を降り、部屋に入った。壁に設



けられていた開き戸を開けると、数十丁もの散弾銃やライフル銃が納められていた。

驚いたことに銃刀法により、所有が不可能な拳銃も多数保存されていた。パイソン三五七マグナム二・五インチモデルやシグザウエルなどの高性能な拳銃も含まれていた。

この家の主は、普通の民間人には思えなかった。たぶん、暴力団関係者であろう。アリサにとり、暴力団など何の脅威に思えなかった。やってきたら、銃で撃ち殺すだけだ。

多数の銃器と大量の銃弾を前にして、アリサは安堵の気持になった。これだけ武器があれば、簡単に殺られることはないだろう。アリサはパイソ

ン三五七をベルトに差し込み、その部屋を後にした。

次にアリサは二階に向かった。二階には五部屋あり、どの部屋も二十畳以上の広さがあつた。その中でも四十畳以上はある主寝室と思われる部屋のドアを開けた。その部屋はリビングとベッドルームそれにバスルームがついていた。

リビングには、外国製の高級ソファセットが中央に配置され、部屋の隅にはバーカウンタが設けられていた。奥の棚には高級ブランディやウイスキーのボトルが並べられていた。

リビングに隣り合わせの二十畳ほどの寝室には、

中央に広大な広さがあるダブルベッドが鎮座していた。  
いた。

寝室には広さが十畳ほどもあるクロークが隣接していた。中には、若い女が着るブランド物の衣服が、納められていた。アリサはその中から、真紅のパーティドレスを取り出した。それを身体の前側にあて、鏡の前でポーズをとった。

「いいね。ここを寝室に決めたよ」

アリサは独り言を言いながら、着ている衣服を脱いで全裸になった。均整がとれた美しい裸身が露になった。乳房や尻にも十分な張りがあった。

絹製のシーツが敷かれたベッドに大の字になった。ひんやりとした絹の感触が全身を包み込むよ

うで、たまらなかった。自然と股間に手が伸びていく。目を閉じて、己が臆やクリトリスを指先でなぞった。最高の気分であった。暫くの間、この家に隠れ住むことに決めた。

ベッドから起き上がり、ベッドサイドにあるテーブルの引き出しを開けた。中にはペニスバンド納められていた。アリサは極太の張形部分を握りしめ満面に笑みを浮かべた。それを腰に装着して、クロークから取り出した真紅のパーティドレスを身に着けた。

屋外に出て、ランドクルーザーの荷台から、意識が戻らない囁子を運び出し、一階にある厨房に運

んだ。大理石の調理台に曜子を縛りつけた。

居間に戻ると、まず、美由紀の縛めを解いた。

後ろ手にした手錠はそのままにした。

「こんなことをして無事で済むと思うの？」

美由紀がすぐ近くで、自分の顔を舐めるように

見詰めるアリサを睨みつけた。

「アタイは、捕まったら確実に死刑なのさ。だ

から思いつきり楽しみたいんだよ」

アリサは衣服の上から、美由紀の乳房を鷲掴み

にした。

「獣！」

美由紀はアリサの顔に唾を吹きかけた。

「威勢がいいのも今のうちだよ。すぐにひいひい

言わせてやるから」

アリサは美由紀の唾を手の甲で拭い、それを舐めた。

「私のことはともかく、彼女達を開放しなさい！」

「わかってない女だな。お前は奴隷なんだよ。口の聞き方に気をつけるんだね」

アリサは、ジーンズの上から、美由紀の股間を強く抓った。

「……」

美由紀は美しい顔に苦悶の表情を浮かべた。

「お前達、名前は何と言うんだい？」

柱に縛り付けた女達に聞いた。

「……」

女達は、アリサに名を聞かれても蒼白な表情で震えているだけだった。アリサは美由紀の股間を抓りながら、空いている方の手で回転式拳銃のパイソンを女達に向けて、激鉄をカチリと鳴らした。

「美奈です」

長身でモデルのようにスタイルが良く、知的で美しい顔立ちをした女が、俯きながら答えた。

肩先が震えているのが見えた。

「香織です」

身長は百六十センチぐらいで、豊かな乳房を持ち、円らかな瞳の女が、蚊の鳴くような声で答えた。

「そうだよ。素直が一番さ。長生の秘訣だよ。お利口なお前達に最高のものを見せてあげるよ。女

が女にレイプされるのを見たことないだろう？」

アリサは、猥らな視線を美由紀の顔に向けた。

美由紀にウインクを送りながら、柔道の足払いをかけた。後ろ手を手錠で拘束されている美由紀は為すすべがなく、床に仰向けの状態で倒れた。大理石の床に頭部を強打し、一瞬意識を失った。

一瞬後、意識は戻り自分の腹に馬乗りになっているアリサの姿を認めた。アリサは両手で美由紀が着ていたTシャツの襟首を掴み、一気に引き裂いた。

美由紀は黒色のブラジャーを身に付けていた。

「結構、淫乱な感じだね？」

アリサは、満面に淫らな笑みを浮かべ、生唾を



飲み込みながらブラジャーを片手で筆り取った。

大きすぎず、形の良い極上の乳房が剥き出しにされた。

「嫌！」

美由紀は絶叫し、アリサを振り落とそうともがいた。

「静かにおし！」

アリサが美由紀の鳩尾を拳で強打した。美由紀は苦痛のあまり、息ができなくなった。そうこうしている間にジーンズを脱がされ、パンティも筆り取られた。糸もまとわぬ全裸にされた。剥きだしにされた股間が寒々としていた。

極上の裸身を抑えつけられ、最初に乳房を激し

い勢いで舐られた。敏感な乳首を舌先で弾かれ、思わず喘ぎ声を洩らした。

「そんなにいいのかい？もっともっと良くしてあげるよ。お前をアタイの女にしてあげる」

「いやよ！変態！」

美由紀は同性により辱めを受ける屈辱に身悶えした。アリサはお構いなく極上の乳房を激しく吸い続けた。美由紀の下半身に手を這わせ、膣やアヌスを触りまくった。乳房の次は、股間に顔を入れ、クリトリスと膣を交互に舐り始めた。美由紀はあまりの快感に我を忘れそうになった。アリサの愛撫は屈辱を忘れかけるほどに巧みであった。アリサは美由紀の尻を両手で押さえながら、激し

い勢いで股間を舐めまくった。美由紀は快感に呑まれぬように、歯を食いしばる様にして耐えていた。不意にアリサが指先をアヌスに忍び込ませてきた。クリトリスとアヌスを同時に責められ、脳内がスパークした。快感の絶頂に昇りつめようとしたところ、アリサがアヌスから指先を抜き、股間から顔を離した。

「そんなに簡単には逝かせてあげないよ」

アリサは、茫然とした表情で天井を見上げる美由紀の裸身を舐めるような目つきで見詰めた。再び、美由紀の股間に顔を入れた。美由紀はアリサの生暖かい舌を股間に感じた。それだけで逝きそうになった。尻を手で押さえられ、舌で膣口から

クリトリスにかけて、なぞられた。アリサの生暖かい舌が、クリトリスをなぞるだけで気が遠くなくなりかけた。次第に嫌悪感が薄れ、代わりに堪え切れないほどの欲情が、湧き上がってきた。

絶頂に達しようとしたら、アリサは愛撫を止めた。執拗にそれを繰り返し続けられた。美由紀は、生殺しの状態に気が狂いそうになっていた。

「どうだい。気持ちがいいだろう？ 逝きたいんなら、アタイにお願いするんだね」

「……」

アリサは美由紀をうつ伏せにして、盛り上がった白い尻に顔を入れ、片手を美由紀の下腹部に入れた。クリトリスを指先で刺激しながら、音を立てて

舐り始めた。美由紀はあまりの快感に屈辱を忘れ、喘ぎまくった。

45

立ち上がった。ペニスバンドの張形部分が美由紀

アリサは快感のあまり失神した美由紀から離れ



の愛液で濡れていた。近くに置いてあったリュックから黒色の特殊ベルトを三つと携帯電話を取り出し、それらを持ち、柱に縛り付けられていた女達に近づいた。二人の女達はアリサが身に付けているペニスバンドの張り方に視線を吸い寄せられていた。無視しようにも顔を動かすことすらできなかつた。

アリサは鼻歌を歌いながら、ふたりの首に特殊ベルトを巻き付けた。残りのひとつを五メートルくらい離れた床に放り投げた。

「こいつが何だかわかるかい？」

アリサは、長身でモデルのような美しい顔立ちをした美奈の黒髪を撫で上げながら言った。

「……」

美奈は俯き、震えるばかりであった。

「あれを見ていてご覧」

アリサは、床に転がっている特殊ベルトを指差し、携帯電話のボタンを押した。閃光が走り、爆発音が響き渡った。床に転がっていた特殊ベルトが爆発し、大理石の床に十センチ四方の穴を穿った。

「わかったかい？アタイに逆らったら、こいつのボタンを押すよ。そしたら、ドカンという訳さ。首から上が無くなっちゃうんだよ。それにこいつから百メートル以上離れたら、自動的にドカンといく仕組みになっているのさ。外そうとしても同



じだよ。防水性になっているから風呂に入っても大丈夫なんだよ」

アリサは楽しそうな笑みを浮かべていた。二人の女達は目を見開き、恐怖の表情を浮かべ、震え慄いていた。

「さあ、楽しいストリップの時間だよ。香織、冷蔵庫から冷えたビールを持ってきておくれ」

香織に携帯電話を見せつけるようにして命令した。

「はい」

香織は蚊の鳴くような声で返事をして、キッチンに小走りで向かった。

「お前はこっちにおいで」

美奈の肘を掴み、居間の中央に連れて行き、そこに立たせた。アリサは近くに置かれたイタリア製の高級ソファに深々と腰かけた。美由紀は全裸のまま、失神し床に倒れたままだ。アリサも全裸にペニスバンドを装着しているだけだった。キツチンから香織が戻ってきて、アリサに缶ビールを手渡した。

「さあ、美奈。着ている服を全部脱ぐんだ。逆らったらこれだよ」

携帯電話を見せつけるように言った。

「香織、お前はここにきて、アタイのマ\*コを舐めるんだよ。早くしないと分かっているね？」

香織はふらふらとした足取りで、アリサの前に

膝間ついた。アリサは張り方を掴んで持ち上げ、股間を剥き出しにした。目の前で茫然とした表情で固まっている香織の髪を掴み、股間に顔を押し付けた。香織は泣きながら、アリサの膣に口を付け、舌を使い始めた。

「なかなか、上手だよ。ケツに指を入れてくれな  
いか。かき回しておくれ」

アリサが腰を浮き上がらせるようにすると、香織は恐る恐ると言った感じでアリサのアヌスに指先を入れてきた。

「そうだよ。その調子だよ。お前はなかなか素直だから、生かしておいてあげようかね。美奈！何  
やっている。早く脱ぎやがれ。ぶっ殺すよ！」

アリサの剣幕に美奈の顔はいっそう蒼白になった。ゆっくりとした手付きで、着ていた衣服を脱ぎ始めた。

「ブラもパンティも外すんだよ！」

美奈は追い立てられるようにして下着を外した。あまりの屈辱に心が張り裂けそうになった。たまらず嗚咽を漏らしていた。素肌は雪のように白くて、シミひとつ無く乳房も大きすぎず、尻も適度な大きさがあつた。

「いい乳してるじゃないか。今度は後ろを向いてケツを見せな」

美奈は泣きながら、アリサに背を向けた。シミひとつなく、むき卵のようにすべすべで白い尻に

アリサの視線が釘付けとなった。

「ブラボー！最高だよ。何てきれいな肌してるんだ。尻の形も惚れ惚れするくらいだよ。こっちに来て、もつとよく見せておくれ」

アリサは上擦った声で命令した。瞳は欲情に濡れていた。ソファの横に立った美奈を両手で引き寄せ後ろ向きにさせた。腰を掴み顔に近づけた。

美奈の盛り上がった白い尻の合間に顔を押し付け、匂いを嗅いだ。

「ウォシシュレット使っているだろう？臭くないよ」

言った後で、舌を出してアヌスをペロリと舐め上げた。

「少し塩味が効いていておつな味だよ」



アリサは、激しい勢いで美奈のアヌスを舐り始めた。美奈は両手で顔を覆い、声を上げて泣いていた。美奈は同性との性的な体験は皆無であった。

同性に辱められる屈辱に気が狂いそうになっていた。アリサの舌が動くたびに、意識が遠のきかけた。アリサは美奈のアヌスを十分に堪能した後で、今度は自分の方を向けさせ、剥き出しにされた膣に喰い付いた。すぐにピチャピチャと膣を舐る卑猥な音が、聞こえてきた。美奈は、美しい顔を羞恥と屈辱に歪ませていた。

アリサの手が忙しそうに、美奈の盛り上がった白い尻を這いまわっていた。

「香織。今度はお前がオナニーをする番だよ。素っ裸になって、テーブルの上に乗るんだ」

アリサは、膣を舐めさせていた香織に命令した。

香織はよろよろとした足取りでテーブルが置かれ

ている場所に移動し、衣服を脱ぎ始めた。すぐに色白でグラマーな肢体が露になった。ガラステーブルの上に座り、俯いて自分の股間を弄った。

「もつと足を開くんだよ。気を入れないとぶっ殺すよ！」

香織は、すべすべでむっちりとした白い太腿を大きく広げ、膣を剥き出しにして、指先でクリトリスを刺激し始めた。

アリスは、その様子を食い入る様に見詰めながら、美奈の膣に指先を挿入した。

「なあんだ。美奈ちゃん。濡れているじゃない。そんなに良かったのかい？」

美奈の素肌は羞恥のためか、ほんのりと赤みを



さしていた。アリサは美奈を前向きに、抱きかかえるようにして張り方を膣に挿入し、腰を上下させた。

アリサの腰が動くたびに張り方で膣壁を擦られ、美奈は美しい眉間に皺を寄せて、小さな喘ぎ声を洩らした。美奈は己が運命を諦めていた。アリサの考えひとつで命を奪われてしまうのだ。美奈は絶望に打ちのめされながらも、小波のように寄せては帰す快感に溺れかけていた。

「本当にお前は可愛いね。身体もきれいだし、お前は最後まで生かしておきたいよ。最後には美味しく料理して食べてあげるからね」

アリサは腰を上下させながら、上擦った声で言

ってから美奈の唇を奪い、舌を吸い出し、存分に舐めた。

第二章 追跡者

第三章 人食いの館

第四章 地獄のハーレム

第五章 人肉の宴

第六章 追跡

第七章 エピローグ

完